



# 鹿沼の自然・栃木の旅

月報第42号

(2016年3月)



三代目、筑後守意安(後に左工門佐)

大永3年始て鹿沼を領し、天文元年壬辰(註・402年前)城を築く。地名は坂田山、亀城と号す。此事末に委しく論ず。3子あり。長男下総守綱房、二男日光座主坐禅院昌膳阿闍梨(後還俗して久能村に叛して殺さる)、三男は徳節齋、(後に兄綱房を殺して殺さる、兄綱房に随いて鹿沼城にあり。)同3年甲午、当城の鎮守として、往古大同年中、祭れる日光山三社(新宮、本宮、滝尾、祭神は大己貴命、味耜高彥根命、田心姫命)なる神社、当処字御所の森(玉田村通り道より東の方なり、椿の木多きを以て土俗椿森と言う。今に石の小祠3社あり)にありを、曲輪の内に遷座なし奉りて今宮大権現と称し、神領を寄付し別所神宮寺を建る。

山口安良『押原推移録』(詳細は4頁から)

北光クラブ

自然観察クラブ 鹿沼



かぬま郷土史探検  
 ～春の御殿山・千手山ハイキング～

鹿沼城の城郭の中核、御殿山、坂田山、千手山はそれぞれ野球場、住宅団地、公園として整備され、遺構はそのほとんどが消滅しました。そうした開発の中で唯一、奇跡的に開発の波を逃れ、遺構の原形をとどめているのが岩上山です。

岩上山は貴重な歴史遺産であり勝手に入山することはできませんが、このたび福聚通郎氏のご厚意により、岩上山を案内していただくことになりました。御殿山方向に向かっていた土塁は先端部が破壊されましたが、福聚氏の屋敷内から美しく原形を留めた土塁を伝って山頂に達することができます。周辺から眺めても想像ができませんが、山頂には広大な平坦地があり、周囲はほぼ全周、土塁で固められています。これが岩上左京殿曲輪くまわです。

今回は全行程、徒歩です。北小御所の森に参詣し、今宮神社の史跡を調べ、岩上山を案内していただき、御殿山に残る土塁や堀、またさまざまな石碑を調べ、切り通しを渡って拳骨山けんこつに登り、堀や土塁を見ながら山頂の曲輪に出て坂田稻荷奥社に参詣し、千手山の堀を見学、スミレなどの植物を観察して北小に戻ります。

日 時：4月17日（日）の予定を改め、

4月24日（日）AM8:00 北小西門集合（解散はPM12:00）

行 程：鹿沼北小……御所の森……宝蔵寺（祐讃の墓石）……坂田稻荷神社  
 ……今宮神社……岩上山……御殿山……雄山寺（壬生上総介義雄の墓）  
 ……拳骨山（坂田稻荷奥社）……千手山……鹿沼北小

服 装：防寒着、帽子、軍手（手袋）、運動靴

持ち物：リュックサック、水筒（ポット）、おやつ、雨具、お手ふき、  
 ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート

必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、LED ランプ、ストック、  
 参考書（栃木県の歴史散歩、柳田芳男著「かぬま郷土史散歩」）、  
 1/25,000 地形図は「鹿沼」「宇都宮西部」

参加費：今年度保険料（4～3月、1年間有効）として

子ども800円、おとな1,850円、おとな（65歳以上）1,200円

問合せ&申込み：電話 090-1884-3774（阿部）

鹿沼の中世史の疑問点をお持ち寄り下さい。たとえば、

- ✎ 御所とは現在では皇族のお住まいを指すように、元々、位の高い人の住まわれる所です。では御所の森（押原御所）に住まわれていた高貴なる人は誰？
- ✎ 日光山と押原（鹿沼）との関係は？
- ✎ 御所の森と今宮神社の関係は？
- ✎ 千手院と宝蔵寺（文殊院）との関係は？
- ✎ 鹿沼権三郎入道教阿とは何者？
- ✎ 壬生綱房とは？ 徳節齋とは？
- ✎ 壬生氏はなぜ滅亡した？
- ✎ 上田城主・真田昌幸さらに真田丸・真田信繁の時代の鹿沼城主とは？



できれば図書館で調べて研究成果をお持ちください。

参考文献：鹿沼市史・通史編（原始・古代・中世）

鹿沼市史・普及版「かぬまの歴史」

鹿沼市史叢書 2・鹿沼町古記録、7・鹿沼の城と館

鹿沼史林 第30号（鹿沼史談会）

かぬま郷土史散歩（柳田芳男著）

押原推移録（山口安良著）

✧ 自然観察クラブ・5月の予定 ✧

- ☆ 5月3日 奥多摩、鷹ノ巣山～六ツ石山ハイキング  
日原……鷹ノ巣山……六ツ石山……奥多摩駅  
AM3:40 クリーニングハウスあべ集合または  
AM4:10JR 宇都宮駅きっぷ売場集合  
(AM4:37 発・熱海行に乗車予定)
- ☆ 5月15日 鹿沼、夕日岳ハイキングと古峰神社参詣
- ☆ 5月29日 (鹿沼学舎主催) 新緑の粟野ハイキング  
～口粟野の自然・巨樹・史跡を訪ねて～

山口安良著『押原推移録』

(昭和9年8月10日・復刻印刷)

上巻

▶ 鹿沼宿

日光道中壬生通り鹿沼宿は、昔より地方に就いては押原村と号し、道中筋に掛りては鹿沼町と唱う。高1699石4斗。

家数 { 延享元子(1744)年御改、538軒、1731人、  
安永5申(1776)年御改、689軒、2412人、  
文政11子(1828)年御改、735軒、2676人

(註、昭和9年4月1日公簿記録、4,668戸、人口22,385人)

内町通りに、上材木町、天神町、久保町、仲町、石橋町、下材木町、寺町、田町通りに、上田町、中田町、下田町、宮街道、外に西横町、東横町、新町、外張<sup>アラトハリ</sup>あり。

▶ 鹿沼古城跡御巡見略記

慶安4(1651)年辛卯3月28日、  
御巡見山中勘兵衛様、星野惣公勝様、  
下野国古城跡御改払の内に云。

▶ 鹿沼町古城(壬生上総介城跡)

一、城の地形、鹿沼町地形より10間高し。

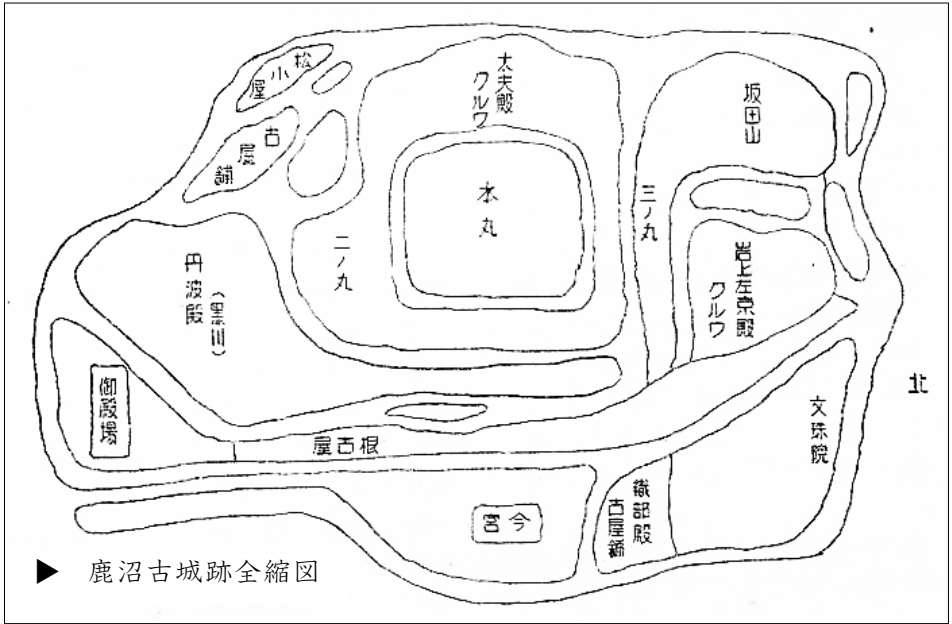
一、本丸、東西40間、南北38間、

一、二ノ丸、本丸より9折5間低し、地形東西45間、南北71間あり。

一、三ノ丸は、本丸より7間下りて東西11間、南北は50間あり。

一、本、二、三の丸より北の方細谷此谷北西に松小屋山あり。本丸山の高さ同前、此上に櫓屋鋪あり。東西36間南北66間、松小屋の山続き、東の方鹿沼町北の方出口に岩上山あり。此の山に櫓屋鋪あり。本城岩上山松小屋山と一ツに総曲輪堀あり。

一、本丸より西の方に、同地形にて33間に21間の丸あり。堀の広さ7間、深さ5間



ありて殻堀なり。

一、右の丸より4間9折、西の方に36間と19間の丸あり。此屋鋪下は田なり。但し西鹿沼村の内なり。

一、本丸堀より南は地形次第に下りなり。

一、根小屋東の方の堀権現前より南御殿の大手口北の角迄、166間、御殿大手口より南入角迄20間あり。

一、御殿の地形東西95間、南北83間、堀口は7間なり。

一、御殿御堀口より鹿沼町通り迄56間あり。

一、城惣構の内御殿の外は、蔵屋鋪侍屋鋪なり。

一、右の堀二、三の丸の分、竹木山に成塚、南次第下り平地、松小屋岩上山雑木山西の谷は田に成る。西鹿沼村なり。

#### ▶ 往古鹿沼領地考

壬生物語に云う、鹿沼城の管する処、南は大宮郷、北は日光足尾高原塩原、東は宇都宮に隣り、佐野に接す。凡そ高18万石余。

磨下城	{	板橋出城守将、	板橋将監近棟、
		羽生田出城守将、	藤倉勘助、

(次ページへ続く)

藤井出城守将、

大垣右工門兵衛、

関八州古戦録に云う、綱房数度の武功によりて、南は大宮村、北は足尾高原辺迄取務して一万貫余の分限として麾下に属する将士数多ありて、勢い近隣を轟すと云々。

(中略)

### ▶ 鹿沼城要害

皆川正中録に云う。抑も鹿沼押原の城は、西の方に西鹿沼村とて、左右に山を引き廻らして、外より地面の一段低き村里あり、縦30町計り横10町余の所なり。常に此処へ大芦川の水を引きて用水とす。又城の要害にも用いたり。此川の末に掛けたる橋を露取橋と云う。今の光太寺の前にある石橋なり。此橋の左右は至って狭き所なり。此川を堰留れば其村里は一面の湖水となりて、水の深き事限り知らず。是を裏手の要害として、又追手口へは、かの黒川の水を堰入れ、内外の堀共に水漫々として、舟にても容易に渡ることを得ずと云々。(以上摘要)

此文によって、今古墟の地理を量り考うるに、その虚文に非ることを知る。志ある人猶よく正し給え。

### ▶ 壬生氏系譜略

壬生筑後守(幼名彦五郎)

京都壬生氏庶子。武家の望みありて下野国に下り、壬生新町堀内に城を築く。実に寛正3(1462)年壬午(註・昭和9年より477年前)の年なり。本姓小槻氏<sup>ヤメ</sup>を闇て壬生と号す。文明元(1469)年己丑、雄琴大明神の祠を建て城の鎮守とし、黒川氏を以て祭主と定む。文正2(1467)年乙丑卒す。法名常楽寺殿前壬生氏雲道鑑大居士。壬生常楽寺に碑碣今猶存す。

二代目、筑後守胤業。

大永3(1523)年癸未卒す。法名大微院殿拈蓋東閻大居士。父筑後守卒後19年目なり。

三代目、筑後守意安(後に左工門佐)

大永3年始て鹿沼を領し、天文元(1532)年壬辰(註・402年前)城を築く。地名は坂田山、龜城と号す。此事末に委しく論ず。3子あり。長男下総守綱房、二男日光座主坐禅院昌膳阿闍梨(後還俗して久能村に叛して殺さる)、三男は徳節齋、(後に兄綱房を殺して殺さる。兄綱房に随いて鹿沼城にあり。)同3(1534)年甲午、当城

(次ページへ続く)

の鎮守として、往古大同年中(1126~31)、祭れる日光山三社(新宮、本宮、滝尾、祭神は大己貴命、味耜高彥根命、田心姫命)なる神社、当处宇御所の森(玉田村通り道より東の方なり、椿の木多きを以て土俗椿森という。今に石の小祠3社あり)にありを、曲輪の内に遷座なし奉りて今宮大権現と称し、神領を寄付し別所神宮寺を建る。弘治元(1555)年乙卯3月17日卒す。法名龍桂院殿雲山良瑞大居士。父胤業卒してより21年後なり。

(中略)

今宮遷座新造天文3(1534)年より当至文政9(1826)年丙戌年数293年なり。尚末に委しく弁ず。(註・昭和9年より数れば399年以前となる)

愚按うに、壬生家は古河公方晴氏膝下の一将たり。古戦録に云う、天文6(1578)年正月、常州小田左京大夫政治、多賀谷下総守家重と心を合せて結城政朝を討たんとす。政朝、古河の御所に加勢を乞う。晴氏諸将に命じて加勢せしむ。その輩には小山、壬生、築田、筒戸、皆川、一色等あり。政朝大いに悦ぶ。

同書に云う。天文23(1554)年10月小田原城主北条氏康、不意に兵を發して、古河公方晴氏を襲い、擒にして小田原に帰陣す。去る天文20(1551)年には関東の管領たる上杉憲政も、氏康のために、上平井の城を没落して、越後に遁れ、長尾景虎を頼みて上杉の苗字を譲り、関東管領の職をも譲る。さのみならず、永禄元(1558)年には、景虎京都將軍義輝公の諱の一字を賜りて、輝虎と改名し、関東を征伐すべき御教書を給わり、また入道して謙信と号す。爰に於て威勢強大なり。関東には小田原、武田、上杉の三家鼎立の如くそばたちて彼を討ち、是を亡ぼして地を廣うせんとす。其外下野に小山、結城、佐野、足利、皆川、宇都宮、多功、壬生、真岡、那須、常陸に、佐竹、小田、真壁、多賀谷の族、上野西郡には小幅、白倉、安中、倉賀野の党、東郡には大胡、山上、桐生、沼田の族、一城一郡に割拠して成敗を計り、諸国の争戦止む時なしと云々。

四代目、下総守綱房。

3子あり。嫡女伊勢亀(愚按うに、伊勢亀は綱房の子に非ず。系譜誤れり。末に記す)二男上総介氏勝(後義雄と改む)三女は皆川山城守広照の室(皆川二代目左京大夫隆康の実母なり)なり。意安の没後、二男義雄をして壬生城を守らしめ、自ら鹿沼城に拠る。然るに、弟徳節齋兄綱房を恨みることありて、天正4(1576)年丙子2月25日、綱房天神の祠前(今の天神町なり)に詣でられし処を窺いて、服心の家来に命じて、大杉の蔭よりして射殺さしむ。下沢村五葉山龍昌院恵光寺に葬る。綱房法名を龍昌院殿恵光芳哲大居士と唱う。父意安の卒後21年。

(次ページへ続く)

按うに、此時、徳節齋の乱故に、壬生に葬むること能わずして下沢村に葬りなるべし。

(中略)。

正中録に云う、綱房宇都宮に属して、那須川井の城主川井出雲守兄弟を攻む。綱房、謀を廻らして、川井を烏山の城に追走らしめて、城を陥入る。高綱(尚綱の誤り)功を賞して千度の里を綱房に与う云々。(以上摘要)

壬生物語に云う。国綱功を賞して、綱房に、茂呂千度の2郷を与う云々。又壬生氏の宇都宮に服従すること君臣の如し云々。酈城一覽に云う、壬生物語の文を以て見れば、綱房の綱の字は国綱の一字をもらいしものか。

愚按うに、綱房の功を賞して、宇都宮より、地を割いて与うるといえるは、上に出せる正中録、那須記と同日の談なり。但し壬生物語に、国綱と云えるは大いに誤れり。国綱は、宇都宮22代目にて慶長2(1597)年乙酉10月13日、太閤秀吉公の勘気を蒙りて没落せし人にて、小田原落城よりは遙に後なり。されば、酈城一覽の論説を待ずして杜撰なることを知るべし。

古戦録に云う。永禄元(1558)年、上杉輝虎入道謙信、是非に小田原を亡ぼして、関八州管領の職を全くせんと欲し、奥州会津の領主芦名左京太夫盛氏に調し合せ、春日山の城を発して、津川口より乱入し、奥州半は手に属して、野州の地へ出陣なし、小山并に結城を攻む。両城共に防ぐこと能わず、箆を巻きて降参す。斯くて、都賀郡に兵を進めて壬生、鹿沼の両城主壬生下総守綱房、嫡子彦五郎氏勝を攻め従い、破竹の勢いに乗じて、宇都宮三郎左衛門廣綱の宿城に押詰め、常陸の街道を開くべしとて真岡、多功、上三河等の枝城へも夫々に軍兵を掛けられける。終に宇都宮も敵すること能わず上杉の幕下に属す。(以上摘要)

宇都宮系図を以て按うに、此時、広綱僅かに9歳也。父尚綱那須と戦い討死後、一族の芳賀左工門後見して城を守る。因みに記す。宇都宮重代補翼紀清両党と称するは、常陸国中里の城主益子4万3千石、下野国真岡城主芳賀5万石余これなり。

又云う、永禄4(1561)年3月輝虎上洛して將軍家に拝謁せんと志を發し、三国峠より上州厩橋に入城して、再び小田原の城を攻めんとす。相隨う輩には、上野国には長野左衛門太夫、長尾新五郎、横瀬雅楽介、桐生大炊介、渋川相模守、安中越前守父子、小幡図書介、白倉左工門佐、大胡武蔵守、森下三河守、富岡主税介、大戸丹後守、尻高左兵衛佐、長根雅楽介、齋藤越前守、深津刑部少輔、宮崎和泉守、後閑刑部五丞、谷備中守。野州には宇都宮の軍司芳賀左

(次ページへ続く)



工門佐、佐竹の陣代長倉遠江守、壬生下総守、長沼山城守、近藤大隅守、西方遠江守、佐野の軍代。常陸に多賀谷、笠間、茂木。武蔵に小幡三河守、木部宮内少輔、長井豊前守、是等を宗徒の輩として大將分76人、軍勢11万7千余騎を卒して云々。

按うに、此文を以って見れば、壬生は元来古河の幕下たりしが晴氏没後、弘治永祿(1555~69)の頃は上杉の麾下に属せしものなり。

#### 五代目

上総介義雄(幼名氏勝)

天正4(1576)年、壬生城に在りて、父綱房の横死を聞きて大いに驚き、急に鹿沼城に発向し、叔父徳節齋を殺して仇を報じ、麾下を安んじて、自ら鹿沼城に居し、老臣をして、壬生城を守らしむ。天正15(1587)年丁亥4月27日、再び今宮の祠の上葺をなし、同18(1590)年庚寅、小田原に出陣して竹浦口を守る。7月8日酒匂川にて卒す。法名寒光院殿雄山文英大居士。今現に西鹿沼村雄山寺に碑あり。末に模写して出す。義雄男子なくして家系絶す。故に、壬生鹿沼の両城おのずからに陥て家臣潰散し、志ある家臣等義雄の後室女子を扶けて、同国下南摩郷古城山の麓に隠る。其後壬生家城主日根埜織部正高吉、是を憐みて5石計りの田を与え、母子を赤塚村に養うと云々。

(中略)

一書に云う、徳節齋、兄綱房を殺して鹿沼城を奪わんとするに、家臣已に服せず、謀相違して大いに周章す。かつ義雄、壬生より攻め来ると聞きて、禍の我が身に至らんことを恐れて、兼ねて、交り深き多気城主芳賀善可の許に走りて隠る。義雄、是れを聞きて大いに怒り、直ちに兵を進めて多気山に押寄せて接戦す。宇都宮尚綱ムスコの男弥三郎廣綱、是れを聞きて、徳節齋の行状憎むべし、然りとて義雄の徳節齋を討つとも、芳賀には何の怨かあらん。義雄の軍配頗る悔りがたし、芳賀如何んぞ敵せんや、芳賀を討たせては叶うまじ。急ぎ勢を出して其動静を見、機変に依りて利害を解いて、義雄と芳賀に和睦なさせ、徳節齋を義雄に討たせて恨みの残らざるようになすべしとて、軍兵700騎を引卒して多気城に馳せ向い、義雄に志を合せて徳節齋を殺しむ。かくて義雄、いよいよ志を固めて宇都宮に服従す。

(中略)

古戦録に云う。宇都宮三郎左工門廣綱、天正3(1575)年乙亥3月15日、那須家と合戦す。相隨う輩には、壬生上総介、塩原宮内少輔、籠谷伊勢守、豊田若狭守、神山隼人正、鹿沼右工門尉以上2300騎云々。

(次ページへ続く)

按うに、宇都宮は、隣堺の大家たるの故に、壬生家もおのずから催促に随いて出勢せしなるべし。又鹿沼右工門の名、爰に始めてみえたり。則ち、下に考を出せる猪倉の城主也。かの延徳年中の鹿沼右工門大夫教清と混ずべからず。

又天正8(1580)年庚辰、宇都宮下野守廣綱死去(36歳)し、嫡子権十郎国綱(後下野守正四位持佐佐竹義昭孫也。)家督たりと雖も、幼稚なる故に、佐竹家の後見を以って国を守る。故に、豊公小田原攻伐の頃は軍代を以って勤めし也。

同書に云う。天正6(1578)年戊寅7月、北条氏政、野州皆川の城を攻む。壬生、小山、佐野、榎本の面々(皆上杉の麾下なり)謀を合せて後結をなす。北条戦い利なくして小田原へ帰陣す云々。又云う。天正6年寅3月、越後の謙信病死す。遺跡の事に依って、養息上杉三郎景虎(実は北条氏康七男初名七郎氏秀、武田勝頼の養子となりて武田三郎と号す)謙信の甥長尾喜平二景勝と遺跡争論の事起りて、家臣左右に別れて、同士討の戦あり。景虎、遂に戦いに敗れて戦死す。於此、景勝全く輝虎の遺跡を相続す。されど、かかる内乱に依って人気定まらず、景勝越山して関東に兵を出すこと能わず。殊に、当時勢い盛んなる織田、武田、小田原の三家を敵に受けて、敵国へ軍を出さんば危き配立たるに依って、先ず自国を守りて根を固くせんとの軍配にて、堺を守りて動かず。於是、皆川壬生、宇都宮を初め関左の列候上杉の麾下たりし輩も、漸くに離れ叛きて、一国一郡に拠りて自己の威を逞しくするに至れるなるべし。戦国の人気、かくあるべきこと也。

按うに、天正年中上杉輝虎没し、武田勝頼も信長の為に滅亡し、関東管領の職に補せられし滝川左近一益も、天正10(1582)年6月、信長、明智光秀の為に弑せられし凶変を聞いて、取るものもとり敢えずに上京す。於是北条氏政に敵する者なく、天正10年の頃に至りては、関東一円、小田原の麾下に属す。壬生義雄も、此頃より小田原の麾下に属せしなるべし。

古戦録に云う。北条氏政、籠城用意の手始めとして、下野国の先方、壬生上総介義雄に命じて、12月中旬、山中の城の縄張を攻め、郭を増し堀を掘らしめ修繕せしむると云々。されば、義雄は、頗る軍術にも達し、老功ありし人とみえたり。

(中略)

(次ページへ続く)



北条氏政

## 中巻

### ▶ 日光新宮唐銅灯籠縮図同考

奉冶鑄

新宮御宝前

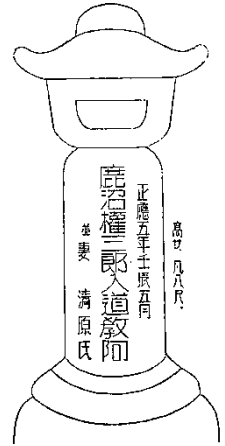
御燈 一基

右者為二世悉地成就円満也利益普及群類矣

正応五年壬辰五月一日

願主 鹿沼権三郎入道教阿敬白

并清原氏女



右在日光新宮大権現神門前自正応5(1292)年去今文政9(1826)年丙戌凡536年(註・昭和9年前641年)

按うに、権三郎入道教阿(先祖考拠なし)唯古老の話に云う、往古正応の頃、鹿沼近郷を領し日光神領を掌り支配してありし人なるべし。故に神徳を仰ぎて灯籠を献ぜしなるべしとなり。

正中録に云う、延徳年間(1481~91)に、鹿沼右工門太夫教清といえるあり。則ち、権三郎入道教阿の子孫にて頗る猛威を振いて、宇都宮家と累世堺を争う事ありと。云々。

再び按うに、正応年中より延徳の間、凡そ200年に近し。此間の系統、諸書を涉獵するに更らに拠を知らず。唯正中録に事証いささかみえたれども、系統を録せず、思うに、軍国争戦の中に居して200年、家系絶せず、名立る宇都宮に敵して、累世地を争う事久しいをみれば、頗る権勢ありし事推して知るべし。博文強記にして、諸家の世系を詮索されたりし文翼子も、好古の癖ある井上信好子も考証すべきものなすと云われき。

正中録に云う、宇都宮18代忠綱(後従四位下任下野守)小山下野守高朝を討たんとするの心ありて、先ず鹿沼を滅し、加園城(主将渡辺右工門尉)南摩城(南摩舎人之介)を降し、勢に乗じて皆川、榎本を共に麾下となして、小山の羽翼を去りて後、小山結城も滅さんと企て、鹿沼を攻めんが為に多気山に城を築きて出張とし、享禄3(1530)年亥10月28日(按うに一書には延徳3年とあり共に誤れり)。大永3(1523)年なるべき由、次に委しく弁ず)1500余騎を卒して出陣す。右衛門教清是を聞き、700余騎を卒して黒川を渡り、上野台に陣す。忠綱多気城より出陣して血戦

(次ページへ続く)

す。教清戦敗れて討死し、鹿沼の領地忠綱の有となる。教清に子なく、鹿沼の血統爰に絶す。(以上摘要)

按うに、上巻に録せる里人の口碑、那須記の趣などは、是を訛り伝えたる浮説を其儘に記せしなるべし。

### ▶ 今宮神社遷座造立大意

元和6(1620)年留書に云う。(正中録に出る趣と大同小異あり。共に実記とすべし)宇都宮忠綱、鹿沼教清を滅してより日光神領迄も犯し掠めて、恣に堺の定杭を建替えておのが領地となし、乱妨狼藉いづばかりなく、其猛威に恐れて加園南摩の両城共に馬を束ねて降人となりしかば、此勢に乗じて鹿沼を根城として皆川を攻むべしとて、延徳3(1491)年11月(大永3年の誤りなり)軍を出して、粕尾、粟野の城を抜き、久野、深程を略し、真名子、大垣を降して破竹の勢に乗じて皆川を攻め亡さんとす。皆川宮内少輔宗成、謀を巡らして小山下野守高朝に調し合せ、密に小山、壬生家を語らい、反りて、壬生家は壬生辺を塞ぎ、小山よりは大軍を催して不意に鹿沼へ押よせ、宇都宮の番兵を追散して宇都宮勢の糧道を断ち、榎本大隅は南を塞ぎて是を討たんとす。斯る手配をなして、皆川宗成川原田に出陣して宇都宮勢に対陣す。(或は合戦場とも云う。按うに川原田村は合戦場の地続にして西裏なり。されば川原田合戦場の辺押なべて戦地なりしなるべし)忠綱、皆川と川原田にて大いに戦い、皆川宗成深入して戦死す。世に云い伝う川原田合戦是也。然るに皆川が謀の如く、小山壬生に結城政勝の加勢等加わりて、鹿沼を奪取り、黒川筋を嚴重に守らせ、夫より大芦川通りを差塞ぎ、加園南摩を攻めんとするに、両城共に忠綱の勢に恐れて降りなれど、忽ち反り忠して小山に属す。爰に於て、忠綱の陣中大に周章す。斯る処に小山勢、西方侍を駈催して忠綱の陣に夜討す。皆川壬生枋木軍兵を合して俱に攻め討つ。宇都宮勢大に狼狽して、兵士数多討死し、惣敗軍となりて、漸くに忠綱虎口を遁れ、引田村なる松坂越といえる所を経て宇都宮に帰陣す。小山高朝、思いの外に、皆川家の謀を以て鹿沼領手に属しければ其功を賞して、皆川宗成の息子山城守成勝に皆川家城付の村々30ヶ村を送り、又壬生家の所領を鹿沼に送り替えて、是迄の壬生領を小山領とす。爰に於て、壬生意安鹿沼を領して、天文元(1532)年鹿沼城を築き(大永3年教清討死より10ヶ年目也。)同3年、日光3社を城の鎮守として、御所の森に鎮座あり今宮の祠を、曲輪の内に移し奉りて重く祀り、日光惣政所の棟札を納めしもの也。棟札今に社にあり次に模写す。

按うに、惣て往古の事跡を後世より記せんとするに、彼是の軍記等を以て考合する

(次ページへ続く)

に、彼と是とは年号等矛盾して合するは稀なるものなり。そは、軍記の作者、唯世に語り伝うる処の端をのみ拠として、我が意の引く方に記し、又は僅かなる事を取執して、面白く事ありげに綴りもし、又は伝写の誤りあるを考索せずして、一方によりて説を立て、甚しきに至りては年号を猥りに改めて、誠らしくも取合するの類往々ある事也。是小説家の常にして、事実を誤るもの少からず。されば又夫れを見る人も、耳を信じて目を悦ぶの輩のみ世には多ければ、文華にのみ意引かれて其虚実を能も糺さずして、何々の書に云々ありなど、数百年古昔のことを、おのれの目のあたり見もせし如く、したり顔に物いい争う人あり。心得あるべき事也。今爰に録せるは、正中録に鹿沼教清と宇都宮忠綱との合戦を、享禄3(1530)年亥10月28日と記し、又一書には、延徳3(1491)年云々と記す。年号月日迄記せしなれば、拠ありてのことなるべけれど、今是れを正しく考る時は、

宇都宮系図云、第18代下野守従四位下忠綱、大永7(1527)丁亥7月16日卒。歳30歳とあり。忠綱の死去大永7年より享禄3(1530)年は、3年後也。大永8年改元ありて、享禄となる。其年号誤れる事知るべし。

今是を按うに、教清討死後、同年忠綱兵を進めて皆川宗成と戦う。此時宗成戦死す。

皆川系図云う。皆川宮内少輔宗成(父は皆川孫四郎氏秀始居皆川)大永3年癸未12月27日宇都宮忠綱与於川原田合戦討死。

是を以て推考する時は、大永3年なる事疑うべからず。

(中略)

又按うに、古戦録に云う、大永3(1523)年10月、総州結城の城主は左工門督政勝という。父は政朝入道孝顕、母は宇都宮成綱の女也。されば宇都宮孫三郎忠綱は政朝の妹婿たり。忠綱生得不義無道にして、結城を亡さんと企をなす。政朝、是を聞きて、兵を卒して宇都宮の領地に乱入す。忠綱手勢を卒して半途に向い、猿山に於て一戦す。忠綱敗れて、居城に入る事能わず。鹿沼の古城に退去して是を避る云々。(以上摘要)

按うに古戦録という書30巻、年号人名等錯乱せし所ありて、悉くは信用すべからずと雖も、又取るべき事も少なからず、此一条も、月日はいささか不審なりと雖も、大綱は違うべからず。忠綱、教清を滅し、勢に乗じて結城をも手に入れんとせしなるべし。されど結城との一戦には打負たれど、なお結城政勝の弟たる小山高朝を討たんとして、まずは小山の一族たる皆川を討たんとして、川原田にて接戦せしなるべし。此時小山壬生結城等心を合せて忠綱の後を襲いしも、忠綱の不義を悪みての事なる

(次ページへ続く)

べし。

#### 結城系図

政明——天文14(1545)年7月13日卒す。69歳。されば大永3(1523)年には歳43歳に当たる。

政勝——政朝の子。永禄卒す。56歳。されば大永3年には、歳20歳に当る。

#### 小山系図

高朝——結城政勝弟、天正4(1576)年12月晦日卒す。69歳。されば大永3年には歳18歳に当る。

是等の諸記録に合し考うるに、何れも年月符号せり。今おのが定むる処誣たりとはいふべからず。

斯くてぞ、本文の如く、壬生家鹿沼を領して城を築き、今宮の神を崇め祭りものなるべし。

#### ▶ 右近殿台の考(註・現今玉松稻荷)

愚按うに、筑後守意安、鹿沼城を築くとあるは、新に築きものか、元来教清の居城ありしを、郭を増し堀を深くなして移りしものか、今に於て知るべからず、思うに教清も、権三郎入道より子孫相続して、200余年の旧家にて、宇都宮としばしば争戦ありし事なれば、家臣良従も数多あるべし。豈居城なくて然らんや。然るに、意安の鹿沼に城を築くとあるを以てみれば、正しく新に城を築ける也。疑うべし。今西鹿沼の地、光大寺の南愛宕山の麓に、東西80間余、南北100間余にして、全く古城跡ともいふべき所あり。土俗呼んで、右近殿台という。教清討死より今を去る事300年に近し、唯往古の城跡也、との口碑に残り、或は壬生家の老臣、右近といえる人の居せし所なりとも云う。

されど壬生家には右近といえる老臣ありし事諸所に見えざれば、是又杜撰の説なるべし。今試みに、強いていわば、右近の台は、右工門の台の唱誤りにて、則ち教清の城跡なるべし。前に録せる宇都宮忠綱、結城勢に戦い負けて、鹿沼の古城に通ると言えるは、則ち往古より鹿沼家の古城ありし、爰を指していうなるべし。右近、右工門の文字も紛れ安し。又唱いも少しは通うようなり。されば巻首に図せる坂田山の古墟は、壬生意安の新に、繩張して築きたるなり。

再按うに、坂田山の古城跡に、岩上左京殿曲輪と号せる跡あり。俗呼んで、ケツリハギという。是は、壬生家になき人なり。又本丸の後に、大夫殿曲輪と号する跡あり。是も又、壬生家に聞かざる人也。依て考うれば、太夫殿曲輪は、則ち右工門大

(次ページへ続く)

夫教清の居せし跡をいうにはあらざるか。されど、又岩上左京といえる人、鹿沼家の老臣の内にありしという説も聞かず。斯くあれば、意安は、教清の古城を修理して居城とせしや、何れなるべきか解し難し。後人は是を正し給え。

## 人物紹介・山口安良



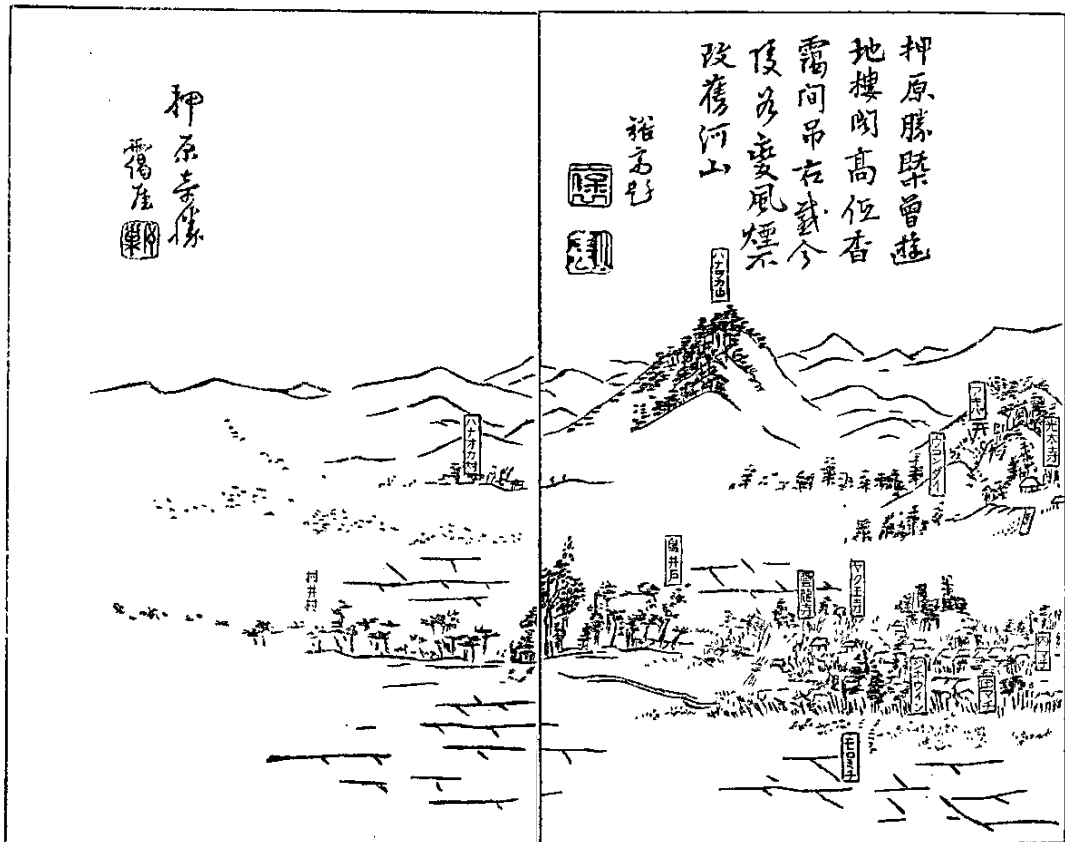
やまぐち やすら、天明元（1781）年9月3日—慶応元（1865）年5月17日。

鹿沼仲町で代々農業と醤油醸造を営む資産家の家に生まれ、鈴木石橋・柿沼広運、石裂の湯沢真竜などに学び、のち江戸に出て学んだ。父を継いで名主となると善政を施し、宇都宮領主から苗字帯刀を許され、のち鄉村取締役に任ぜられるなど公私多端の間に、よく古書を繕き著作も盛んにする。和歌・俳句・狂歌を研究し、また各地を遍歴し足跡は遠く蝦夷松前にまで及んだ。85歳で没。法名浅桑園高誉歌園安良居士。市内雲竜寺に葬られる。

『押原推移録』は、平素の読書から押原（鹿沼）に関する旧記をまとめた史書。文政9（1826）年脱稿、4年後に上梓刊行した。木版で上・中・下の3巻からなる。江戸の町民文化華やかな時代を背景に、優れた才・学・識により中世から近世にかけての鹿沼宿の移り変わりの克明な記録に祐筆をふるった。上の巻は鹿沼宿・古城跡・鹿沼右衛門の考・壬生家系譜略など19項目。中の巻は日光新宮灯籠・今宮神社遷座造立大意・今宮造立棟札・鳥井跡地名考・今宮祭礼の始など27項目。下の巻は慶長以橋鹿沼東西町・押原地子免・市場総論・藤房郷御遺物塔・紫雲山千手観音略伝・東照宮渡御記・慈眼大師伝記略など22項目で、鹿沼の歴史を古書旧記・現地文書・伊勢神主佐八文書・古老の伝承まで実証的に駆使し批判を加えて書き上げている。後の『鹿沼市史』は本書を母体のひとつとしている。

本記事は、昭和9年に須賀進・愛波泰蔵・渡辺与四郎氏らにより刊行された孔版本を元にした。毛筆体で書かれた原書を読みやすく書き下し、和綴じの一巻本にまとめたもので広く流布したらしく、国立国会図書館にも所蔵され、画像データがデジタルコレクションとして公開されている（この翻刻本にも過誤はあるようだ）。

# 高久靄屋の筆による押原（鹿沼）鳥瞰図



- 一向寺（廃寺）
- 根古ヤ——根小屋（城下）
- ヤクシ——薬師（廃寺）
- 清八マ寺——清林寺
- 光太寺
- アキハ——秋葉（秋葉神社）
- ウコンタイ——右近台
- 八ナヲカ山——花岡山（富士山）
- 内マチ——内町
- 田マチ——田町
- ジホウイン——持宝院（廃寺）
- モロミチ——茂呂道
- ヤク王寺——薬王寺
- 雲竜寺
- 鳥井戸——鳥居跡
- 押原勝概曾遊地
- 楼閣高低香靄間
- 吊古載今稜谷変
- 風煙不改旧河山
- 裕斎題
- 押原奇勝
- 靄屋

「押原推移録」が書かれた文政年間（1830年頃）の鹿沼（押原）の風景です。





馬頭・鷺子山ハイキング  
 ～神社・仏閣・城跡・横穴墓群探訪～

2月21日（日） 天気・晴

国史跡の「唐<sup>から</sup>の御所<sup>おうげつぼ</sup>」横穴墓を見学、精巧につくられ、玄室など、ほぼ原形を保っているそうである。国土館大学の考古学研究部の学生たちが等高線を測量していた。

同じ敷地内に馬頭中学校と馬頭小学校があり、学校をはさんで馬頭院<sup>むも</sup>と武茂城跡（県史跡）をめぐった。馬頭院からの見晴らしがすばらしかった。境内に光園参詣記念の植樹とされている推定樹齢約300年の枝垂栗<sup>しだれぐり</sup>があり、いくつかの榎<sup>いが</sup>が幹に残っていたので栗の木だとわかった。

静神社と武茂城跡（県史跡）の2つともひと気はなく、城跡はあまり人が入らないらしくうっそうとしていた。健武山<sup>たけぶやま</sup>神社はかつて砂金を採取していた山に鎮座している。ちょうど祈年祭の神事の最中で、社殿に大勢の氏子が正装して並んでかしまっていた。社務所では女性衆が忙しそうに働いていた。「古代産金の郷」の大きな碑が建っており、里人は、このことを誇りにしているのだと思った。

鷺子山<sup>とりこの</sup>上神社までは車で。日曜日のこととて人で賑わっていた。神主が雛飾りを飾りつけていたり、フクロウ（不苦勞）の神社として有名だからか、フクロウを売る店や茶店があったりで、参詣者の多いことがわかる。昼食にお汁粉、コーヒー、焼きウィンナーを頂いて楽しいひとときを過ごした。

帰途、「いわむらかずお絵本の丘」美術館に寄った。いわむら先生が集った人たちに本の朗読をしているところであった。

今回も楽しく充実した一日であった。



鷺子山上神社  
本殿前にて

東風吹くや雑木ゆすりてゆきにけり

雛飾る神主の手の大きけり

等高線測るまなざし春の山

弓子

（西山弓子）

参加者

稲葉幸枝、西山弓子、石崎隆史・裕子、阿部良司・みゆき（計6名）

❖ 見た植物  
ミツデウラボシ (写真→)



❖ 見た鳥・聞こえた鳥  
イカル

❖ 写真  
「唐の御所」は地味な遺跡だが  
学生たちの測量調査で賑わっていた→



岩場に彫って築かれた「唐の御所」



これは墓室の入口の一つ



展望絶佳の馬頭院



静かな静神社



↑ 鷺子山上神社本殿  
境内の方々にフクロウが



← 冬は葉っぱだけのヒガンバナ ↓  
冬の里山の彩り  
ヤブツバキ



→ モミの巨木



← とちぎ名木百選  
鷺子山の千年杉



## 御殿山の忠霊塔とカツラ

御殿山球場を囲む土手の上には数々の石碑が見られる。今宮神社の大鳥居から西に向かい、市役所駐車場を右に見て登って行くと右に御殿山会館がある。ここは三の丸の跡であり、廃城後、その下に一向寺というお寺があったという。それについては後に述べる。道路を登りつめて土手の上に出た所が二の丸にあたる。現在の外野スタンドの土手は、土塁の形をしているが、ほぼ新しく造られたものである。二の丸に出る手前で外野スタンドの土手に沿って外側に続いているのが二の堀である。

土手の上には「櫻樹増植記念之碑」(昭和4年)、「露店組合」「御大典記念井戸」(大正4年、天皇即位御大典記念)、それぞれの石碑が並んで立っている。球場を右回りに進んで行くと4等三角点があり、イロハカエデの大きな木を左に見て、堀を見下ろす所に「寶塔慶讃供養塔」がある。左に土塁が美しく蛇行しながら延びている。ひときわ高くそびえる屋根つきの石塔は「宝篋印塔」。その先に9基ほどの石塔がまとめられて立っている。天神町と刻まれた「巳待供養塔」もある。宝篋印塔以下、これらの石塔は先程述べた一向寺にあったものであるが、明治維新の際廃寺となり、会館裏に移され、会館再築にともない忠霊塔の左に移された。その忠霊塔の立つ広々とした一角は「太夫殿曲輪」である。その背後には土塁が延び、その土塁上から見下ろす堀は切通し(千手町-西鹿沼線)で遮断されてしまったが、拳骨山まで延びているはずである。この「太夫殿曲輪」の前面に大きな鳥居が立って球場を見下ろす。鳥居をくぐって参道の正面には忠霊塔が聳え立っている(右写真)。先の大戦で鹿沼より出征し、戦死された御霊を祀るものである。仰ぎ見る左右には狛犬が構える。忠霊塔建設の記は次頁のとおり。



忠霊塔左側には日清戦争(明治27・8年)凱旋の碑(凱旋とは戦いに勝って帰ること)がある。忠霊塔の右手には、日露戦争(明治37・8年)の大きな忠魂碑が立つ。さらにその右手に、鹿沼の俳壇「鹿鳴連」(48名)が、大正4年11月10日に建てた其角堂機一の句碑がある。

故としより十日の菊の節会かな

以上、目についた石碑、石塔を紹介したが、内容はほぼ柳田芳男著「かぬま郷土史散歩」(左写真)に頼った。

この忠霊塔のすぐ先にトウカエデ（右図上の葉）の巨木がある。地上 50cm の所で二股に分かれているが、根元の周囲は 330cm。中国原産の樹木。坂田山側から車が入るため、ここで土手が切れており、橋を渡る。小さな小屋の向こう側にケヤキ（右図中の葉）が立つ。胸高周囲 320cm。その先に、すっと立って空に枝を拡げる形のよい高木。これも鹿沼城の遺構であろうか、崖際に立っているため周囲を計測することはできないが、直径 130cm ほど。周囲は 400cm 以上ありそうなカツラ（右図下の葉、左下写真）である。カツラは古峰原の沢沿いで見られる。石裂山の「千本カツラ」は栃木県の名木 100 選に指定されているが、石裂山に別のカツラの個体は見えていない。普通、平地林で自生は見られない。アトリの群れが留まっている小枝を見ると冬芽が左右対称に付いており、おのずと葉の付き方も対生であることがわかる。



いにしへの いくさを偲ぶ 山城に  
聳ゆるカツラ 守り見るなり

良司  
(阿部良司)

忠霊塔建設の記

茲に大東亜戦争に従軍し護国の神と化した鹿沼市二千五百余柱の英霊を祀る願うに卿等は万里の異郷にあつて硝煙弾雨の下祖国日本の平和と幸福のため奮戦されたが敵弾に斃れ山野に骨を曝し蒼海の藻屑と消え或は病魔に冒されて世界平和の礎となり大東亜國諸民族の自覚の先導となつた 昭和二十年八月十五日大詔下り終戦を迎えたが卿等は遂に生きて還らず誠に痛恨の極みである

爾来十三星霜を閲し遺族一同の宿願漸く達成して市当局の熱意と市議会の協賛と市民の熱誠とにより忠霊塔建設の竣工をみ卿等のみたまを塔内に安置し併せて意義深き一粒の仏舍利と数握の南方ユーギニアの珊瑚礁の砂とを塔の基底に奉安して世界永遠の平和を祈念し再び恐るべき戦争の起らざることを冀うものである 戦没英霊願わくば永く安らかに鎮まり給わらんことを

千載青史の上稀にみる戦史を回想し感慨愈々深く碑文を草しこれを刻して長く後世に留める

昭和三十三年十月十日

元陸軍大将男爵奈良武次撰并書

建設者 鹿沼市遺族会連合会

鹿沼市

## ヒガンバナ

植物の同定をしようとする時、すなわち名前を調べようとする時、なるべく多くのカギ、つまり特徴が見られた方が正確な同定ができる。その特徴を見るべき代表的な材料は葉と花の色や形や付き方であろう。花が終わっても実があれば、それも重要な材料である。茎もちろんそうであるし、樹木では樹皮の様子や模様、さらに冬芽の形や付き方もそうである。

秋に芽を出して葉を拡げ、ロゼットで冬を越し、春に開花する植物、あるいは春に芽を出して葉を拡げ、夏に開花する植物、それらの植物の花を付ける前の草をさして「これは何という植物ですか」という質問をされてもなかなか難しいものである。ところがその草に花芽が付き、開花すると、その花を見ただけで名前がわかることが多いものだから、いちいち葉を見ない。それでいつになっても葉の形、様子を覚えられない、ということになる。花が咲いていたなら、その下にある葉の様子を見る、そのことをぜひお勧めしたいものである。花が咲く前の葉や茎を見ただけでも、種類がわかるようになるためだけでなく、それによってさらに正確な見極めができる、という意味もある。

ところが、花が咲いているのを見つけても、必ずしも葉を拡げていない植物がある。これから花の季節を迎えるサクラのいくつかもそうである。花が咲いているのに葉を拡げていないサクラ、といえはつまり早い季節に咲くサクラである。フコザクラ、ヒガンザクラ、カンヒザクラ、マメザクラ、エドヒガン、ソメイヨシノ、カワツザクラ等がそうであろうか。花が終わっても実を見ることができるとはいつでもやはり花の色や大きさはサクラの場合、検索のための重要な材料である。

ここで植物の継続観察の大切さに気づくのである。すなわち、花の咲いている時に、花の色や形で種類に目星を付ける。その個体のある場所を記録しておいて、あるいはその個体にマークを付けておいて、葉を拡げた後にもう一度観察して種別を確定する、というものである。

しかし、言うは易しである。先日、馬頭行で、西山氏と一緒に参加された稲葉氏が、静神社で「これはヒガンバナですね。」と細長い葉の束を指して言われた。「ムム、これがヒガンバナ？」ヒガンバナの葉をはじめて見たわたくしなのでした。花の季節に葉がなく、葉の茂っている季節に

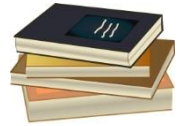


花は咲かない、という不思議な植物です。千手院山門周辺や石段、駐車場周辺の斜面にもたくさん見られます。(写真)

(阿部良司)

月報第39号の補足

奈良の友人が新年のあいさつに来られたときのこと、月報を見つけて読んでおられた。これはすごくいい、おもしろいという評価であった。奈良へ帰ったあともいろんなこと書いてんねなあと。田部重治の本は友の家で読んだことがあるそうだ。その友は亡くなったのでもう行くことはなく、何という本かは思い出せないが趣味が同じなので気に入った本だったそうだ。その本は今どうなったのだろうか。好きな人にあげたり故人の形見として残すこともある。それなら救われる。けれども興味のないものは処分してしまうのが常である。ある古本屋の店主から聞いた話で、奈良の大和高田市に古新聞、古雑誌、それに多くの本が集められる所があり、そこで売れそうな本をキロいくらで安く仕入れてくるのだという。資源の少ない日本では再生紙などにリサイクルすることは大切なことだが、その中には絶版となった貴重な本もたくさんあるはずである。それを同じように扱われることを遺憾に思うのだ。古本などの集積場は各県にあるはずで、足をこせば思わぬ掘り出し物が見つかるかも知れない。もちろんプレミアが付いていないので安く手に入るだろうから定期的に行くことをお勧めする。恥かしいことではなく、これこそが最良のリサイクルである。



話はかわって、友人が来たときは月報第39号が最新版だった。

それで「真珠はドブガイからも作ってんのとちゃうの」と言う。たしかに日本の真珠は海棲の貝しかふれていない。去年12月に高島屋の京都店で淡水貝による真珠の販売があると知り見に行ってきたので続編としたい。

滋賀県真珠養殖組合が琵琶湖でイケチョウガイから真珠を作っていて、京都造形芸術大学の学生がふだんの日でもアクセサリーとして身につけられるようにデザインしている。同組合が真珠を販売するのは、およそ20年ぶりだそうだ。ブラウン色系の真珠で、アコヤガイに引けをとらない立派なものであり、丸いものは日本の技術がここにも生かされていると思った。「琵琶パール」の愛称であるが量産できないようで、およそ40個の限定販売であった。気になるお値段は、平均価格(1つ)2万5千円である。このほか「りゅうちゃん、昔、宝石みがきしてたやろ、そのことも書いたら」という。それは阿部隊長に相談しないとわからん、かつてに書かれへんね(そんなことはないのだ

が)と言った。

最後は誕生石の補足です。誕生石は世界中にあります、万国共通ではありません。国によって違うのです。民族がちがえば変わるのかも知れませんが、不変的なものであれば、どこの国でも同じはずです。「誕生石にこだわる必要がない」と書いたのは、そのためです。  
(山口龍治)

## ☪ 読者からいただいた作品 ☪

板荷にお住まいの福田君子さんから詩の作品をいただきました。

### 千手山

一 覚えていますかこの山を 薄紅色したこの花を

手を繋ぎ上つてこの坂 夜桜の中へ

運命が時を超えて 再びめぐり逢い

こころとこころが呼び合うから

私は駆け上りたい 千手山

二 山門くぐつて石だたみ お参りしたよね観音さん

思い出を閉じ込めてここに ふたりの恋は

運命が時を超えて 再びめぐり逢い

涙の蕾は陽だまりの中へ

桜の石段上り 千手山

三 満開桜の木の下で 街の灯が眠るまで

あの時は言えずにいたこと 聞かせて下さい

運命が時を超えて 再び廻る時

花びら髪に降つてあなたの手に舞う

このまま帰りたくない 千手山



千手山観音堂



## 山書談話室

白坂正治さんからのおたよりです。

前略

「月報第41号」ありがとうございました。

山口氏の自然観は田部先生の自然観にもつながる豊かな情操の水脈の賜物だと思います。例えば、どれだけの現代人が「空気」の味を知っているでしょうか。感覚、感性を磨くことは人間を磨くこと。自然の敵になってはいけませんね。

“湯の湖”は「山と溪谷」「日光湯本」の約文で前・中・後全て略されています。照らし読みしてみると表現も微妙に変わっています。

「栃木の文学」は残念ながら(?)綺麗でしたが、どういう授業がされたのか、教科書類は書き込みが多いと嬉しい(!?)ですね。教科書といえば小学校のに楨有恒の“マナスル”の文章と富山の山案内人志鷹完次郎を描いた“山にささげた一生”が載っていました。後者は先生(山好きの方)にいつ学ぶのか聴いた記憶も。ひそやかな山岳文学への開眼(?)かもしれません。

‘16. 3. 7

草々

## 愛書家のひとりごと

### 注目すべき印刷技術

鹿沼の中世史を学ぼうとする時、文政13(1830)年、山口安良によって執筆、刊行された『押原推移録』は最も重要な文献の一つである。城下町でもなく、一つの宿場町でしかなかった鹿沼において、このような歴史書が出版されたことは、当時の鹿沼の人々の経済的な豊かさの上に培われた知的水準の高さを示すものである。鹿沼市民にとって、この本は宝とすべき、誇りとすべき遺産である。

昭和51年版の解説書の「まえがき」に鹿沼史談会の中島正先生が次のように書かれている。

「20余年前、『押原推移録』の写本を、偶然手にしたときのことは、今でも忘れられません。そのころ私は、郷土史に興味をもちはじめたばかりで、この本の存在を全然知らず、驚喜し夜を徹して筆写しました。

(次ページへ続く)

『温故知新』。全くそのとおりだと思います。この本から受けた恩恵は計り知れず、これなくしては、当地方の研究はあり得なかったことでしょう。先般発刊された『鹿沼市史』も、これが母体となったものです。」

1冊手元に置きたいと、インターネットサイト「日本の古本屋」で調べると、5冊出てきた。解説書付きの2冊組。きれいなものは7～8,000円が相場のようなのだ。昭和51年、鹿沼市誌料刊行会から刊行されて「枋の葉書房」から出版されている。1冊だけ、2,500円というものが出ている。この本だけは昭和9年に刊行されたものだ。安くて古いは望むところ。早速注文して送られてきた本は、背を糸で綴じた和装本で、題箋は元々のものではなく、後にペンで書いて貼り付けられたものではないかと思う。背にサインペンのような黒で書名が書かれている。紙が薄いせいもあって傷みやすく、読み潰された感があり、所々の頁が破れている。紙は和紙であろうか、非常に薄い紙で、一部原著の写しや地図は木版であるらしく、本文は孔版すなわちガリ版刷りである。僕が小学生の頃、先生に渡されたプリントはたいていガリ版刷りであったと思う。当然、先生がやすりの上で鉄筆で書いて謄写版の原紙を作られたのであろう。この押原推移録の文字はガリ版刷りではあっても1字1字活字のように書かれたものであり、筆耕が手掛けたものであろうか。文政13年刊行の元版は当然毛筆体の木版刷りであるから、昭和9年刊行のこの本は初めての異装再版本である。さらに中島正先生が書かれた「まえがき」には、



「復刻については、昭和9年に、須賀進氏の執筆で、愛波泰蔵、渡辺与四郎氏らにより、孔版本が刊行され、この記念碑が雲竜寺にあります。その後は、小太刀源吉氏により、『下野史談』に連載され、また先般『鹿沼市史』編さんのとき史料とした、孔版刷があります。」

この孔版本の出版が記念碑を建立するような出来事であったのである。

美本であれば古書価にもう一つ、0が付いていてもおかしくない代物である。見返しに大きく「山口茂著 押原推移録 上中下巻」とある表題はつやからして毛筆で直接書かれたものらしい。巻末には「山口信一蔵版」と印刷され、印刷所は今宮町の白亜房(佐川弘光)とある。端の方にこの本の元の所有者の住所と姓が毛筆で書かれている。

愛書家にとっての本の魅力は、標題、著者、内容、表紙、装丁、製本、紙、付録

などである。当然、字が上手なら署名も嬉しい。愛書家は読書家とは違う、とはいえ、どんなに表紙や装丁に目をひくものがあるても、表題、内容に興味のない本は、手に取ることもない。



もう一つ、印刷も考察すべき項目であろう。活版印刷はヨーロッパでは江戸期より以前に発達していたらしく、日本にも渡っていたらしいが、江戸期において印刷の主流は木版であり、その技術も多色刷りにおいては世界一であった。浮世絵の世界的な人気は、その芸術性のみならず、ものによっては400色という破格の多色刷り技術の上にあるのである。

本の印刷においても筆記体か活字体かは別としても、大きな版木に彫り師が彫ったものであるが、一昨年の秋、輪王寺宝物殿を訪れた際、学芸員の佐々木茂氏が「私はこれに注目しました」と見せてくれたものは、一文字版木(?)であった。すべての文字について、それぞれはんこのような版木をそろえておき、それを並べて、文章にして印刷。並べた版木をばらばらにして、また並べ替えて別の文章を印刷する、というものである。いわば木版版活版印刷である。

現在当たり前になってしまったオフセット印刷の出て来る十数年前まで、印刷といえば活版印刷であった。もちろん木版ではなく鉛のはんこであり、一度印刷に使ったら全部溶かして、またはんこを作るそうである。十数年前に出版された本を見る時、活版印刷であるか、オフセット印刷であるか、確かめるのも楽しみである。(阿部良司)

## ☪ ニューズ ☪

### ①北小感謝の会で北小児童よりお手紙をいただきました。

サマースクールの時は、お世話になりました。あべさんのおかげで、水中の生物などの事がよく分かり、とても楽しかったです。くわしく教えてくださったので、今も、ザリガニや魚、カエルの事をおぼえています。ありがとうございました。

(3年1組・北川菜々子)

この前の自然観察楽しかったです。ありがとうございました。またもっと自然のことを知る事ができました。初めて聞く事ばかりで自然がもっと好きになりました。本当にありがとうございました。楽しかったです。

(4年2組・北川桃子)

(次ページへ続く)

毎年昆虫観察でお世話になっています。今年もかぶと虫、くわがた虫、せみ、とんぼなどたくさんの昆虫に出会えました。とても楽しかったです。来年も参加したいです。ありがとうございました。  
(4年・石川晴樹)

## ②アトリ飛来

### 冬鳥「アトリ」の大群が飛来 鹿沼

鹿沼市南部の奈佐原町や大和田町で冬鳥「アトリ」の大群が飛来し、田んぼで餌をついばんでいる。12日にも、群れとなった鳥影が竜巻のようにも見え、偶然通りかかった人々を驚かせた。

アトリはスズメ目アトリ科に属する渡り鳥で体長16センチ前後。同地区の住民らによると、1月中旬に飛来し数を増したという。この地区は昨年9月の水害で水田が冠水し、大きな被害を受けた。多くは収穫できず、稲穂が餌となっている。近くに黒川、平地林もあり、鳥にとって好環境といえる。県立博物館によると、「アトリの飛来は年によって違うが、ことしは多い」という「アタリ年」。

観察を続けている同市下奈良部町、会社役員宇賀神喜一(うがじんきいち)さん(66)は「こんな光景は今まで見たこともないし、何万羽いるか分からない。自然観察をするものにとっては貴重な体験」と話している。

(2016年2月13日下野新聞)



撮ってきた写真  
(2016年2月14日)



### 氾濫余聞

昨年9月に北関東一帯を見舞った水害では、何十年に一度と言われる天災に対する、我々の生活基盤の脆さを思い知らされた。しかも、4年半前の大震災はまだ記憶に新しいが、規模こそ違え、その折沿岸部を襲った津波のような水の脅威に、こんな内陸で曝されることになると、想像できた人は少なかつただろう。

浸水の憂き目に遭った住宅の多くはどうか復旧し、街なかには何事もなかったような日常が戻っているが、強大な水の力に破壊された河川敷は、川筋もかなり変わっているし、修復の手が回らぬまま今なおその爪跡が方々に残り、遊歩道や児童公園や広場も崩落したり瓦礫に覆われたりしたままの所が多い。市内を網の目のように縫っている水路も、取水口が漂着物で塞がったためか水が涸れたままで秋を過ごし、冬を迎え、水路か

(次ページへ続く)

らの滲出水によっていたらしい我が家の浅井戸も、涸れたままである。ボランティアや公共工事の手が次第に入り、水路には最近ようやく流れが戻ってきたようにも見えるが。

あれから5か月も経って、かの氾濫がもたらした珍現象に出くわすことになろうとは。それは、「アトリの大群」である。

下野新聞2月12日(金)付1面に写真入りで紹介されていた(前頁参照)のに、気が付かずにいた。

その前日、たまたま市内の今宮神社で、ケヤキの高い梢に群れていた小鳥の写真を撮って拡大して見ると、普段あまり目に留まることのない野鳥、アトリである。こんな所で目に掛かるとはまあ珍しい、という程度の感慨であった。

次の日曜日、ある野鳥愛好家に見せてもらったのが、その大群の写真！ 市南部、大和田橋辺りの、昨秋冠水した後放置された田んぼに、豊富に残された籾を食べに集まっているのだという。

まだいるだろうか、早速車を走らせて見に行く。件の地点に近付いた車窓に、竜巻のような勢いで風にうねっている、まるでイナゴの大群、といった光景が、造作もなく飛び込んできた。



いたいた。しかしイナゴではない、小鳥の巨大な群れだ。広々と見渡せる田んぼの上空と地面の間を、空の半分を埋めるほどの数の群れが、凄まじい勢いで風に翻っている。時折黄色や白や褐色の彩りも見える。新聞を見て出かけてきたのだろう、川の土手から田の畔にかけて、三脚を立て双眼鏡や望遠レンズ付きのカメラを構える人と車の姿も方々に見られる。

少し離れた田の畔に車を置いて歩いて接近して行くと、生身の人間はそれとなく避けるように遠巻きに、群れがうねり続ける。見ていると、どうやら猛禽類もこの「ごちそう」目指して飛んできて、群れを攪乱しているようだ。通りかかった車の人の話では、止めた車の中でじっと見ていると、その群れがぶつかってきて、ガラスに激突して落ちた鳥を、今度は猫が漁夫の利よろしく失敬して行くという場面もあったとか。

帰宅してインターネットで検索してみると、この鳥、よそでも同様の大群が目撃されることがあるようだ。最近では鹿沼の映像も加わった。エサのある所に群れをなして集まる習性がある鳥らしい。シベリアへの渡りの季節を控えて、たっぷりエネルギー補給できたことだろう。3月末には姿を消したということである。

田んぼが復旧するにしろ何にしろ、来年はエサもなく、こんなに集まる光景を再び目にすることもなからう。我々にとって「天災」は災難だが、彼ら野生動物には、豊富なエサにありつけばそれに集まるのが自然の成り行き、たくさんあれば「お祭り」である。人間様が困っていいようが関係ない。彼らは遅い。と共に、不謹慎にも(?)「お祭り」の後の一抹の寂しさを覚えている人間である。

(編集子)



自然観察クラブ 2016年度 活動予定

- 4月3日 武州、高尾山ハイキング  
～早春の草花、成虫越冬の蝶、葉王院を訪ねて～
- 24日 かぬま郷土史探検～春の御殿山・千手山ハイキング～
- 5月3日 奥多摩、鷹ノ巣山～六ツ石山ハイキング
- 15日 鹿沼、夕日岳ハイキングと古峰神社参詣
- 6月5日 日光・中禅寺湖南岸、巨樹探訪の会  
～千手が浜～阿世瀧～中禅寺立木観音参詣～
- 19日 会津、田代山ハイキング～オサバグサを求めて～
- 7月3日または10日または17日 日光、女峰山～帝釈山登山  
～ハイマツの岩稜登行～
- 24日 北光サマースクール・雑木林の昆虫観察
- 31日～1日 日光、男体山登山～二荒山神社中宮祠と奥社参詣～
- 8月7日 北光サマースクール・魚類観察
- 20日 日光、赤岩滝ハイキング～柳沢川源流遡行～
- 9月11日 日光、白根山登山～弥陀ガ池と五色沼探訪～
- 10月16日 安蘇、根本山ハイキング～ホソエカエデを求めて～
- 11月20日 奥久慈、八溝山ハイキング～日輪寺参詣～
- 12月18日 安蘇、寺久保山ハイキング～出流原弁天池探訪～
- 1月 宇都宮、長岡の森ハイキング～長岡百穴と瓦塚古墳～
- 2月 足利、大小山ハイキング～栃木城跡と圓通寺参詣～
- 3月 下野、風土記のみち～古墳探訪と大神神社、蓮華寺参詣～

(企画立案：佐々木伸二・阿部良司)

自然観察クラブ 会費納入のご案内

年度末です。年会費の納入をお願いいたします。

口座番号：ゆうちょ銀行店番 078 普通 0528847

☆ 年会費（個人または家族） 1,800円

〃 （会報不要または直接取りに来られる方） 600円

※ 会報はインターネットでもご覧になれます。

## 自然観察クラブ 2016年度 会員名簿

(ほぼ50音順・敬称略)

石崎隆史・裕子

大貫とし子・辰郎

小川真司・恵美・知峻・裕月

小島美穂

櫻井節子

佐々木茂・理恵・伸二・千洋・真澄

塩入宏行・佳子

白坂正治

西山義信・弓子

福田 淳、キヨ

山口龍治

若林滋子

渡邊真知子

阿部良司・みゆき

### ㊦ 編集後記 ㊧

3月号をお届けします。自然観察クラブが歴史書に取り組む、というのはそもそも無謀で、大変遅くなりました。表紙の本は、旅、読書、歴史と続きましたが、「…栃木の旅」の表題に免じて、ご了承ください。すでに4月末、今年度も引き続きお付き合いいただきますよう、お願いいたします。

2016年度活動予定。男体山、女峰山、奥白根山と高山がある一方、「かぬま郷土史探検」「中禅寺湖南岸」「長岡の森」「風土記のみち」等、ほぼ平地歩きも多く取り入れてみました。ちなみに女峰山は、77歳の西山義信氏のご提案。

奥白根山がシカの食害で魅力が失せてしまった今、女峰山、太郎山は栃木県内では最も貴重な高山植物の自生地です。

4・5月号は合併号になりそうです。ご了承ください。

#### ☆ 会費の主な用途

会報発行・発送用諸経費（郵送料、封筒・印刷用紙、インク代等）、  
プリンター保守費用、臨時催事の通信、その他

☆ バックナンバーご希望の方、毎月2部以上送付希望の方は、阿部まで。

☞ 本号の内容 ☜

活動案内	かめま郷土史探検～春の御殿山・千手山ハイキング～	2
5月の予定		3
表紙の本	山口安良著『押原推移録』	4
活動報告	馬頭・鷺子山ハイキング～神社・仏閣・城跡・横穴墓群探訪～	18
探訪・鹿沼の鎮守と古木	御殿山の忠霊塔とカツラ	20
Uniqueな鹿沼の植物	ヒガンバナ	22
山口さんの自然講座	月報第39号の補足	23
読者からいただいた作品	千手山	24
山書談話室		25
愛書家のひとりごと	注目すべき印刷技術	25
ニュース		27
おしらせ	2016年度活動予定／会員名簿／会費納入のご案内	30
編集後記		31



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第42号

2016年3月発行

北光・自然観察クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町1818

(クリーニングハウスあべ内)

発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☎ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail a2b5r7j7@one.bc9.jp

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

